



1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
いきいき久間っ子の育成	<p>本年度は、「思いやりの心を持ち、自分で考え、進んで表現し、活動する子どもを育てるために、すべての子どもが『参加する』『できる』『わかる』教育活動に取り組む」に重点をおいて全職員で実践し、学校の課題である学力向上・心の教育・特別支援教育の問題を解決するために、校内研究を中心において継続・徹底した指導を行い「いきいき久間っ子の育成」をめざしていく</p> <p>①<学力の向上>・・・工夫して学ぶ子プロジェクト ○授業に交流タイムを設定し、書く力話す力などの表現力及び読む力を伸ばす ○ICT利活用による授業実践を積み上げる</p> <p>②<健康な体づくり>・・・強くて逞しい子プロジェクト ○日常的な遊びや運動の習慣を身につけて体力の向上を図る ○朝食を摂る習慣を身につける。 ○目標の時刻までに布団に入る習慣を身につける</p> <p>③<道徳教育の推進><特別支援教育の推進>・・・心やさしい子プロジェクト ○心に響く授業づくりを通して道徳心の向上を図る ○支援体制の充実 ○学習環境のユニバーサル・デザイン化に取り組む</p> <p>④<地域連携の促進> ○地域の人材・教材を生かした実践の充実を図る(「嬉野学」地域教材・地域人材活用)</p>

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 「工夫して学ぶ子」育成に向け、自分で考え創り出す活動の実践

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	最終結果	(・)そうだった訳 (◎)今後の取組や改善策
教育活動	●学力向上	読書活動の充実	・年間「100冊読書」達成する児童を80%以上にする。 ・年間「50冊読書」達成する児童を100%にする。	・朝の時間に読書タイムを行い、静かな授業の始まりを迎える。 ・週末読書や読書回覧板(低学年)に取り組み、家庭での読書の習慣化を図る。 ・図書館祭りや読み聞かせを実施する。	A	・2月中旬で全児童が50冊読書は達成できた。 ・100冊読書は、80%の児童は達成できている。3月までもう少し増えると思われる。 ・今年度今までのイベントに加えて、2月に図書パズル大会にも取り組み最後の追い込みができた。 ・3月の「ありがとう集会」では、ぶつくぶつくママにも出演してもらうことができた。 ◎今後も引き続き子どもたちが積極的に図書室へ向かうような働きかけをしていく。
		家庭学習習慣の確立	・家庭学習に取り組む方法が分かり、自ら家庭学習に取り組めると自信を持って回答する児童を90%以上にする。	・家庭学習チェックシートに取り組むことで、家庭学習指導の徹底、学習準備の徹底や学習習慣の確立を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、学年に応じた学習時間や内容の充実を図る。 ・家庭学習(自学)ノートコンテストを実施し、更なる内容の充実を図る。	A	・児童アンケートの結果、「毎日、家で勉強している」と答えた児童が93%(3, 7)であった。 ・家庭学習チェックシートの「帰ってからすぐ宿題をする」の項目は、10点中9, 3であった。 ・放課後の「嬉野市子ども学校塾」の先生との連携で、宿題で間違っている問題や理解が不十分なものをチェックしてもらえようになり、担任も個々の児童のつまずきをより確実に把握できるようになった。 ◎今後も学校と家庭と学校塾とで共通理解を持って、家庭学習の習慣化、学力向上へつなげていきたい。
		獲得した知識・技能を活用し、表現する力の育成	・自分の考えをノートに書いたり、「交流タイム」で発表し合ったりすることができると回答する児童を80%以上にする。	・授業の中に自分の考えをまとめる時間や伝え合う時間を確保し、表現することの大切さを実感させながら表現力の育成を図る。 ・研究授業等を設定して、児童の表現力を育成する指導力の向上を図る。	B	・児童アンケートの結果は、80, 5%(3, 1)であった。中間評価よりも上がっているが、まだ十分とはいえない。 ・道徳の時間の交流タイムを中心にペア交流やグループ交流は楽しんでできているように見えるが、全体交流や児童の自信にまでつなげることができていない。 ◎今後も引き続き児童のつぶやきを発表につなげる教師の力量が必要だと考える。
	●ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育の推進	・教職員のICT利活用教育に関する基本的なスキルの向上を図る。 ・電子黒板やICT機器を活用した授業を積極的に進める職員を95%以上にする。	・電子黒板やICT機器等について、校内研修会を計画的に行うだけでなく、支援員を活用してミニ研修会を随時設定する。 ・ICTを利活用した実践の情報交換を行う。	A	・アンケートの結果、電子黒板やICT機器を活用した授業を積極的に進める職員は、2回目のアンケートでは数値は若干落ちているものの、1回目と2回目の平均値は95.5%と目標数値を達成しており、日頃よりTPOに応じて、ICT機器を効果的に活用している。 ◎職員は、十分活用できているが、さらに校内研修会などで情報交換ができればよい。
	○子どもの活動づくり	学級活動の充実	・係活動や当番(日直・掃除・給食)活動で「責任を持って自分の役割を果たしている」と回答する児童を90%以上にする。	・学級において、仕事を担う意義を理解させ、計画・実践・ふり返りの時間を保障し、活動の支援や助言を行う。 ・係活動で、当番的活動と自主的活動を意識させて取り組ませる。	A	・児童アンケートの結果は、96%(3, 6)であった。中間評価よりも上がっていた。 ・QUTテストや児童アンケートの結果をふまえ、個に応じた支援を続けてきた。 ・委員会活動においては、6年生を中心に創意工夫できる力をつけ自主的な活動ができるよう取り組ませた。 ◎今後も高学年の児童が自信を持って活動できるような委員会活動、各学級で楽しんで取り組めるような係活動を仕組んでいきたい。
○学習環境の改善充実	学習環境のユニバーサルデザイン化	・場や時間の構造化、情報(刺激)の調整等をすべての教室で取り組み、すべての子どもが安心して学べる学習環境を整える。	・年度当初に、具体的な取組を確認し、全職員で取り組む。(前面掲示:学級目標と生活目標、電子黒板のブラックアウト、棚のカーテン化) ・給食当番表様式の統一化を行う。 ・スケジュールボード、タイマーを活用し、学習や生活の見通しを持たせる。	A	・年度当初に全職員で話し合ったことを確認し、実践できている。 ◎今後も全職員で共通理解を持ち、取り組んでいきたい。	

② 「強くて逞しい子」育成に向け、進んで運動に親しむ活動の実践						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	最終結果	(・) そうなった訳 (◎) 今後の取組や改善策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・毎日、朝食をとって登校する児童95%を目指す。 ・目標の就寝時刻に布団に入る児童を90%以上にする。	・毎月、保健だより・食育だよりを発行し病気の予防法や食事の大切さを保護者に伝える。 ・朝食をバランスよく食べることや睡眠の大切さを保護者や児童に伝える。 ・年に3回生活習慣チェックシートを配布し、生活習慣を見直す機会を設ける。 ・学級通信で、月初めに、「早寝・早起き・朝ご飯」を推奨する。 ・就寝時間(布団に入る)の目安:低(9:00)中(9:30)高(10:00)>	B	・学校評価アンケートでは、朝食の喫食率は中間評価に続き98%と高かった。一方、就寝時刻を守れている児童は84%で中間評価とさほど変わりはない。 ◎家庭の生活リズムを変えるのは、簡単なことではないが、児童の健康のために早寝・早起き・朝ごはんを引き続き呼びかける必要がある。家庭生活チェックシートを配布するときに、起きる時刻と就寝時刻を家庭で親子で決めるように推奨する。今後も継続して、学級通信や保健便りで啓発をする。
		運動習慣の定着化	・昼休みに外に出てよく遊ぶ児童を90%以上にする。	・いろいろな運動を紹介し、児童に奨励する。(縦割共遊、がんばるマラソン、久間リンピックチャレンジランド) ・外遊びを奨励する。(前期は学級で、後期は全校的取り組みを行うようにさせる。) ・天気の良い日は外で遊ぶように放送で呼びかける。	A	・学校評価アンケートでは、昼休み外で運動したり、遊んだりしている答えた児童が中間評価よりも高く90%であった。天気が良い日には、担任が児童に対しみんなで仲良く外遊びをするように声掛けを行った。 ・年間2回の久間リンピックやがんばるマラソンの取り組みにおいて、全学年でアスレチック運動やなわとび、マラソンに積極的に参加することができていた。それぞれにおいて、がんばる旬間やがんばるカードを準備したことが効果的だったと考える。
	○子どもの活動づくり	縦割り活動・クラブ活動の充実	・縦割り活動で「他の学年の人と楽しく活動できた」と回答する児童を90%以上にする。 ・クラブ活動で「他の学年の人と協力して活動できた」と回答する児童を90%以上にする。	・異学年で共通の興味・関心を追求させながら、活動計画や準備を事前に知らせたり、活動中の進行等をしりする自主的な活動の場を保障する。 ・異学年で交流する楽しさを味わえる、場と時間を保障する。	A	・学校評価アンケートのたてわり活動においては、98%の児童が楽しく活動できていたと答えている。朝のたてわり共遊や大縄跳びの練習の時間を計画的にとることができた。そして、昼休みには、たてわり班で6年生が中心となって、大縄跳びの練習をする児童も多く、異学年間で楽しく遊ぶことができていた。 ・クラブ活動でも、年間計画通りに活動することができたため、各クラブにおいて毎回充実した活動を行うことができた。 ◎今後もたてわり活動やクラブ活動を計画的に実施していく。

③ 「心やさしい子」育成に向け、人の気持ちを考える活動の実践

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	最終結果	(・) そうなった訳 (◎) 今後の取組や改善策
教育活動	●心の教育	道徳教育の充実	・道徳教育を校内研に位置づけ、心やさしい子の育成と、職員の研修の充実を図る。 ・年1回以上、道徳の授業を公開する。(7月の授業参観「ふれあい道徳」)	・道徳の授業研究会を全学級で実施する。 ・道徳の教科書を活用する。 ・「心やさしい子」プロジェクト部会からふれあい道徳を提案する。 ・ふれあい道徳の実施にあたっては、地域人材の積極的活用や「学校便り」、「学級通信」等を通じた情報発信に努め、広く道徳教育への理解を図る。	A	・1年間を通して、計画通り授業を進めることができた。夏休みの授業づくりの研修を生かした授業実践もできた。 ・各学年道徳ノートを活用し、家庭に持ち帰らせることで、保護者も目を通すことができていた。コメントを書く保護者もいる。 ・ふれあい道徳も、各学年の実態に合わせた内容で行うことができた。 ・学校評価アンケートで保護者は第1回目の2回目も平均3.5。よくあてはまるの項目は、2.6ポイント高くなっている。職員は1回目と2回目の平均が3.7と高い。 ◎来年度も、引き続き教科書を用いて授業実践や保護者への情報発信を図っていく。
		生徒指導の充実	・人の気持ちを考えることができると回答できる児童、80%以上をめざす。 ・自分からあいさつができる児童が、児童・保護者アンケートで80%以上をめざす。	・あいさつ、そうじ、思いやりの3点について月ごとに具体的なめあてを設定し、プロジェクト部会を中心に達成状況を評価しながら年間を通して学年に応じた指導を行う。	A	・学校評価の挨拶項目、児童93.1%、保護者95.9% 第1回目の結果と比較して、保護者の評価が4.1ポイント高くなっている。児童も、保護者もあいさつへの評価が高い。 ・学校評価の掃除項目、児童92.5% 第1回目の結果と比較して、3ポイント高くなっている。掃除前の立腰と、無言そうじの呼びかけの効果が出ていると考える。 ・学校評価アンケートの人の気持ちを考えることができる項目、児童96%、保護者96.5% ◎来年度も引き続き、校内だけでなく家庭や地域でのあいさつ、無言掃除、人の気持ちを考えた行動についての指導を継続していく。
		特別支援教育及び教育相談体制の充実	・特別支援教育について理解し、取り組んでいる職員を90%以上にする。 ・気にかけておきたい子の実態、支援の在り方について共通理解を図り、実践している職員を90%以上にする。	・特別支援教育に関する研修会を実施し、特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制を確立する。 ・毎月の「子ども支援会議」で支援の必要な児童の実態についてスクールカウンセラーを活用しながら情報交換し、支援方法の検討をする。	A	・スクールカウンセラーを活用し、計画的に支援した。また、夏休み中にも、研修を行い、共通理解を図った。 ・学校評価の特別支援に関する項目、職員91.7%。 ・子ども支援会議で、共通理解できている。 ◎引き続き、子ども支援会議で共通理解をしつつ、みんなで支援に生かしていく。 ◎保護者の評価が平均3.4で、0.1ポイント低くなっている。教育相談よりなどでの情報発信を、さらに工夫していく。
	●いじめ問題への対応	・いじめのない学校づくり	・人権教室、児童アンケート等を行うことにより、いじめを許さない意識付けを図り、早期発見・早期対応をしながらいじめ「0」をめざす。 ・満足型の学級づくりに100%取り組む。	・児童のアンケートを年2回実施する。(7・12月) ・児童のアンケートを基に児童との面談を実施し、いじめの早期発見、よりよい解決に努める。 ・「仲間・連帯」「やさしさ・思いやり」をテーマとした人権集会(6月、11月)を実施し、児童の心を耕していじめを許さない心を育む。 ・ハイパーQUの効果的な活用を図るために研修会を実施し、ハイパーQUを実施して、児童の実態把握を行うことで支持的風土のある学級経営を行う。	A	・いじめアンケートをもとに、早期発見、解決に努めることができた。 ・学校評価の「学校が楽しい」と回答した児童98.8%、98.2%となっている。 ・ハイパーQUの研修を行って、学級作りの計画をたて、実践した。2か月のQUテストを行い、指導の成果を確かめた。 ・何かあったときに、すぐに相談できる雰囲気を作っていくことを心がけた結果、児童の「相談できる人がいる」の項目が平均で3.5であった。 ◎来年度も引き続き、いじめアンケートやQUテストなどで実態を把握し、児童の実態に応じた対応を行っていく。

④保護者・地域との連携を深めるコミュニティー活用の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	最終結果	(○)そうだった訳 (◎)今後の取組や改善策
学校運営	○保護者・地域との連携	保護者・地域との連携とコミュニティーによる学習支援体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の授業参観率を85%以上にする。 ・家庭や地域コミュニティとの連携を図った授業や活動を計画的に実施し、地域の教育力を活かした学習支援体制を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校だよりやHP等で早めに授業参観日や懇談日を知らせ、保護者が計画的に参加しやすいようにする。 ・各教科や総合的な学習の時間における年間計画を作成するとともに、連携活動に係る事前打ち合わせにおいて、活動のねらいや内容についても共通理解を図る。 ・地域コミュニティに加え、家庭にも積極的に呼びかけて、支援体制の充実を図る。 ・児童や保護者に対して、地域行事や地域ボランティア活動等への積極的な参加を呼びかける。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・11月の「久間っ子集会」の参観率は97%、1月の授業参観率は83%で、これまでの平均は86.5%となり、目標を達成することができた。特に「久間っ子集会」では、家族揃って、また地域の方も来校され、全体で280名の参観があった。「子どもたちの頑張る姿を見られてよかった」という意見を多くいただいた。 ・PTAでは、今年度吉木知也先生を招いて教育講演会を開催し、子育てについて考える機会を持つことができた。 ・久間コミ活動では、これまでの実践の積み重ねで支援者も慣れていらっしやるので心強い。担任や担当の思いも伝えることで、授業の意図に沿った支援をしていただくことができ、充実した活動になった。 ◎久間コミ活動を含め、外部人材を生かした教育活動の見直しを行い、来年度につなげるようにしたい。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	衛生管理の改善・充実	<ul style="list-style-type: none"> ・職場の多忙感解消 ・定時に退勤できた職員の割合を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事のメリハリをつけて、毎週金曜日を定時退勤日とし、その確実な実施を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・職員アンケート(2回目)では、1回目の3.3から2.9と、0.4ポイント下がっている。意識は高まっているものの、実際問題として放課後の事務や、次の日の授業準備などで、定時退勤日もなかなか定時には帰れないといった現状である。 ・4月から1月までの、管理職を除く平均残業時間は、月33時間44分となっており、その中でも最長時間は52時間28分という結果であった。 ◎文部科学省の「働き方改革」に関する通知文では、「年5日以上」の年次休暇取得「残業は月45時間、年間360時間以下」という指針が示されているので、今後はこうしたことを念頭に置きながら、勤務時間の適正化を図っていくことが必要である。 ◎全員一律に残業時間を削減することはとても難しい面もあるので、自分にあつた「一人一改善運動」(例えば、定時退勤日に定時に退勤できなければ、その週のどこかで定時退勤をする、いつも19時頃に退勤している場合は、15分早く退勤するようにする など)に取り組むとともに、お互いがワークライフバランスの取れた生活ができるような雰囲気づくりや声かけなどを行っていきたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

教育活動	○小中連携教育	小中連携教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・9年間を見通した基本的な生活習慣、及び、学習習慣の確立を推進する。 ・「ろくさんプラン」の分科会ごとに、スリーステップで取り組む内容を把握し、実践していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学校の生徒指導方針の情報交換を行い、本校の生徒指導に活かす。 ・発達段階をふまえた小中一貫した授業規律を共通理解し、実践していく。 ・参観できる授業や出前授業等について相互に情報交換し、授業交流を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・「ろくさんプラン」の各部での話し合いを生かして、校内でも取り組むことができた。特に、「ノーテレビ・ノーゲームデー」は、塩田中学校区で実施日を揃えることにより、取り組みやすくなったようだ。今年度は、保護者へ「ノースマホ」も呼びかけた。文書やメール、学級での指導で、実施率が81%(昨年度平均)から87%(今年度2月までの平均)に上がった。 ・6年生では、いろいろな面で中学進学を意識した指導を行った。また、「教育相談小中連携シート」をより中学校で使いやすいものに更新してもらい、中1ギャップの解消に役立ててもらったようにした。
	●小学校低学年の学習環境の改善充実	学習習慣や生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・話を最後まで静かに聞くことができる児童を90%以上にする。 ・学用品の忘れ物がない児童を90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の授業で話を聞く態度について、随時指導をする。 ・自分のことが相手に伝えられるように話し方の指導をする。 ・「べんきょうのやくそく」を配布し、家庭学習の習慣化を図る。 ・「家庭学習チェックシート」を実施し、家庭と連携を図りながら学習習慣や生活習慣を確立させる。 ・学用品の忘れ物については、個別に指導し、家庭との連携を図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケートにおいて、1年生も2年生も先生の話をよく聞き授業を受けている児童は99%であった。一部の児童は、まだ個別の指導が必要ではあるが、人の話をよく聞こうとする態度が育っていると考えられる。年間を通して、話を聞く約束を統一して指導したため、児童同士で声をかけあう姿も見られるようになった。 ・学校評価アンケートにおいて、必要な道具を忘れずにもってくるなど答えた児童は、98%だった。保護者にも毎日の準備のチェックをこまめにお願したこともあり、前日に次の日の準備をする習慣ができてきた。 ◎家庭と連携を図りながら継続して、よりよい学習習慣や生活習慣を身につけることができるようにしていく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目

4 総合評価

・昨年度と比較して、「運動習慣の定着化」「生徒指導の充実」「(低学年における)学習習慣や生活習慣の確立」をBからAに高めることができた。それぞれのプロジェクト等での提案を受けて、全職員が一丸となって取り組んできた成果とも言える。また特に本校は道徳科の研究に取り組んでいること、人権・同和教育にも力を入れてきていることから、「心やさしい子」の育成については、年度当初の目標を達成できたことは何よりである。

・「学力向上」の面では、基礎基本の定着や読書量の増加は図られてきているが、児童の主体的な学習意欲の喚起といった面や、表現力や活用力の向上という面では、今後もその対策を講じて取り組んでいく必要がある。新学習指導要領による「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して、職員研修の充実を図っていききたい。

・「特別支援教育及び教育相談体制の充実」については、本年度通級指導教室を開設できたことにより、さらに子どもの特性に応じた教育を施すことができた。また外部機関との連携が十分に図られ、特にうれしの特別支援学校からの巡回相談を頻繁に依頼、実施してきたことで、早め早めの対応ができ、効果的な支援を行うことができた効果は大きい。また、定期的な「子ども支援会議の実施」や年に12回のスクールカウンセラー来校や週1回の教育相談員の来校時にも、情報交換を綿密に行い、個々の児童や保護者の特性に応じた対応をすることができた。

・久間コミュニティとの連携活動(久間コミ活動)については、学校と地域コミュニティとの間で目的や内容を共有し、事前準備から当日の運営までスムーズに行うことができた。またコミュニティスクールとしての職員の意識も更に高揚し、学校と地域が一体となった教育活動が定着しつつある。今後は、そうした連携活動のみならず、学校と地域が課題を共有し、その課題解決に向けた熟議や実践がなされることで、さらにコミュニティスクールとしての飛躍が期待できると考える。

5 学校関係者評価(2月18日:第3回学校運営協議会より)

・これまで数年間B評価だった項目(「運動習慣の定着化」「生徒指導の充実」「低学年における学習習慣や生活習慣の確立」)が本年度A評価になったことは、たいへん良かった。日頃の先生方のご尽力によるものと感謝している。

・職員アンケートの結果、1回目アンケートから2回目アンケートでいくつかの項目について数値が下がっていることについて気になるが、先生方が自分の取組に対して肯定的に捉え、自信を持って好評価をつけられるような雰囲気あるいは環境作りをお願いしたい。

・「職員の多忙感解消」や「定時退勤」については、なかなか難しい面もあると思われるが、これまでの取組を見直したり、スクラップアンドビルドを行ったりするなどして、できるだけ勤務時間の適正化を図ってもらいたい。

・「児童虐待」や「いじめ」については大きな社会問題として取りだたされているが、学校としてさらに予防や早期発見、早期対応に努めていただくとともに、地域コミュニティや関係機関と連携を深めながら、より楽しい学校づくりを行っていただきたい。

6 来年度の課題・改善策

・保護者アンケートにおいて、学校教育目標の認知度が85.7%ということについては、さらに周知や啓発活動を図り、95%以上になるように努めなければならない。

・来年度の1年生は2クラス編制の予定である。そのため、2クラスの担任が相互に協力及び連携をしながら、望ましい学習習慣や生活習慣を身につけさせていく。

・本年度もB評価であった「獲得した知識・技能を活用し、表現する力の育成」については、工夫して学ぶプロジェクトや学力向上コーディネーターを中心に1年生から6年生までの実態に応じた方法を体系的に構築し、PDCAサイクルを通して確実に育成していく必要がある。また「望ましい生活習慣の形成」についても、「早寝、早起き、朝ご飯」をはじめ、月別の生活目標や「〇〇週間」などの取組をもとにして日々の指導を充実させるとともに、「家庭生活チェックシート」を介して保護者との連携を強化しながら目標を達成していききたい。

・「心の教育」や「いじめ問題への対応」については、本年度全ての項目においてA評価となったが、このことに甘んずることなく、引き続き指導を充実させていく必要がある。特に「いじめ防止」や「児童虐待防止」については、喫緊の重要課題となっていることを踏まえ、全職員が共通理解を図り、同じベクトルで指導し、児童にとって安全安心な学校づくりに取り組んでいきたい。

・職員の「衛生管理の改善・充実」については、引き続き定時退勤日の確実な実施や、一人一改善運動の実施などをとおして、職員の意識を高めていくとともに、健康でワークライフのバランスが十分に図られるような職場づくりを管理職を中心に行っていききたい。